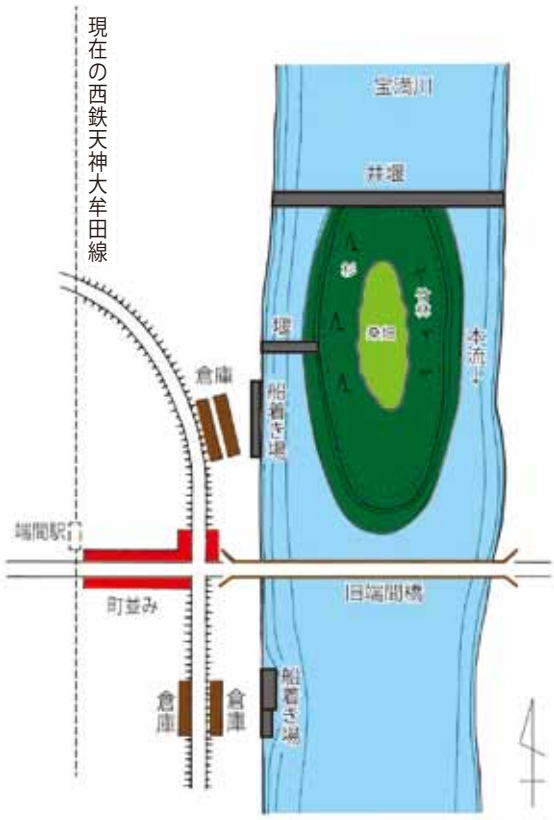
発見！おごおり遺産

No.13 水と暮らし

前回までは、石造物をテーマに紹介してきましたが、今回から３回に渡って人々の暮らしと水との関わりを紹介していきます。

薩摩街道干潟野越堤



当時の端間港のようす（倉庫の位置は推定）

日本では古くから「水を制する者は、国を制す」と言われます。これは、河川が急傾斜で、大雨をもたらす台風が多い日本をよく表した言葉です。小郡市も、これまで何度も筑後川や宝満川の氾濫に苦しめられてきました。市内には、当時の人々の苦労や工夫の跡が多く残されています。

平成28年10月、干潟の道路工事中に大規模な石垣が発見されました。長さ約90ｍに渡り、道の西側斜面とその下側に石が丁寧に敷かれています。このような大規模な石造物は市内では初めての発見で、専門家による調査の結果、これが江戸時代に造られた水利施設であることが分かりました。

この「薩摩街道干潟野越堤」は、当時の参勤交代道であった薩摩街道を、野越しの機能を利用して洪水から守る施設です。野越しとは、河川の堤防の一部をあえて低く造ることで、洪水の際にそこから水を外側に流し、下流域の被害を最小限に食い止める構造のことです。この貴重な施設は、平成29年に市指定文化財に指定され、現地にそのまま保存されています。

市の南部には、洪水の教訓を忘れないため、さまざまな場所に当時の氾濫水位を示した看板があります。また、光行と平方の間には洪水を防ぐ水門の跡があり、下岩田の天満神社には洪水の際に使用した舟が残されています。

洪水によって人々を苦しめてきた宝満川ですが、それ以上の恵みをもたらしてきたことも事実です。古くから宝満川は重要な交通路で、稲吉では今から約８００年前の川港が見つかりました。この稲吉元矢次遺跡からは、中国から持ち込まれた貴重な磁器が大量に出土しています。

その後、江戸時代に川港として栄えたのが端間です。幕末には米の集積所ができ、米蔵数棟が建設されました。中でも端間を繁栄させたのが、石灰の大量取引です。当時、石灰は酸性土壌の中和に利用されていました。幕末以降の端間には石灰を満載した船が入港し、港の周囲には町並みができました。

小郡市は、水の恵みと怖さの両方を経験してきました。その経験を未来に伝えていきたいものです。

問合せ先　文化財課☎７５・７５５５

おごおり遺産とは？》》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産＝市民のたからのこと